

Partial CLIL と小学校外国語活動

— 小学校 5 年生の家庭科実践の分析から —

A Study of a Partial CLIL Approach to Teaching English in Elementary Schools:
The Practice of Partial CLIL in Home Economics Classes

太田 圭* 長瀬 慶来**
OHTA Kei NAGASE Yoshiki

要約：本研究は、外国語活動における他教科を取り入れた授業を実践し、内容言語統合型学習（CLIL）の小学校現場での実践可能性を検討したものである。筆者が所属する公立小学校において実際に授業を行い、普段の外国語活動との比較分析も行った。中高の教科担任とは異なり、全教科を担当する小学校においてこそCLILを実践する意義があると考えてのことである。小学校5年生を対象とした家庭科の授業を構想しながら、場面設定の必然性や語彙の精選、ワークシートの開発を行った。その際意識したのは、あくまで教科書や指導書をベースにした指導計画や教材とすることである。多忙と言われて久しい教育現場において、無理なく実践可能であること、そして学習効果をあげられることを検証するところに本研究の意義があると考えたからである。実際に授業を実践してみると、対象の児童はまだ外国語活動が始まって数か月であったが、英語をツールとして用いることについての気づきや、教科を学ぶ動機づけを高める効果が確認できた。以下に詳述していく。

キーワード：小学校外国語活動, Partial CLIL, 合科, 教科, 教科横断的指導

I はじめに

2017年3月、文部科学省より次期学習指導要領が公示された。その中で小学校中学年から外国語活動が始まり、小学校高学年からは教科としての英語が始まることが示された。これにより児童が小学校在学中に英語に触れる期間が、これまでの2年間から4年間と2倍になる。小学校の外国語教育は2011年に小学校5年生から必修となり、「外国語活動」として取り組まれてきていたが、今回の教科化により「外国語」が正式に教科となったことは次期学習指導要領の大きなポイントだと言える。教科化されるということは、いよいよ評価が入ってくるということである。小学校英語教育は今後、これまでとは異なった展開を見せることが予想される。

現行の学習指導要領の「外国語活動」としての目標は次のようになっている。

「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの素地を養う」。

あくまでも素地を養うことを目標としているのであり、具体的に外国語の文法や語彙などを知識として学ぶ必要はない。ことばが話された文脈や話し方などから相手が伝えようとしている意味や意図を類推することを体験的に学ばせているのだ。このような外国語活動の中で、筆者自身が小学

*教育実践創成専攻（教職大学院）大学院生 **教育実践創成講座

校英語教育に携わってきた経験からすると、繰り返し発音するだけの単語カード、チャンツやゲームなどの遊び中心の活動、不自然な場面設定のやり取り等があまりにも多い。高学年段階の児童は知的好奇心も高まり、また、その範囲も多岐にわたるようになる。単調な活動、言い換えれば思考を伴わない活動にはすぐに飽きてしまい、コミュニケーション能力を伸ばすところまで至れていない傾向があるのではないだろうか。そこで、児童の興味関心に対応して知的好奇心を刺激しつつ、内容や思考活動を伴う手法を模索していた時に出会ったのがCLIL（内容言語統合型学習）である。CLILとはヨーロッパを起源とする外国語指導法であり、言語学習と教科内容を統合させた学習のことである。語学の学びと教科の学びを効果的に結びつけることにより、学習の相乗効果を生み出すことが特徴としてあげられる。このCLILを用いた試みは、近年笹島（2011）、和泉（2012）らによって行われるようになった。しかし、実践の中心は高校や大学を対象としたものが大半であり、小学校での実践例は極めて少ないのが現状である。基本的に全教科を担当が指導する小学校では、これまでも教科横断的な取り組みが行われてきた土壌がある。筆者は合科学習が根付いている小学校だからこそできる実践があると考え、家庭科の授業を構想し、実践した。児童のワークシートへの記述及びアンケート調査の結果から検証していく。

II 研究の背景と先行研究

1. CLILの理論的枠組み

CLILとは内容言語統合型学習（Content and Language Integrated Learning）のことで、もともとヨーロッパのEFL環境下で始まり、1990年代に発展してきた教授法である。ヨーロッパ連合（EU）統合により、ヨーロッパ市民の外国語教育によるコミュニケーション能力の育成と、多文化への理解が求められてきたことが背景にある。1995年に発令された母語以外の2言語を学ぶことを目標としたEUの言語政策の下で広まり、現在ではヨーロッパのみならず北米やアジア諸国でも実践が行われるようになってきている（池田，2011；笹島，2011；山野，2013）。

CLILの定義は様々になされるが、一例としてMarsh（1994）の定義を引用する。

“CLIL refers to situations where subjects, or parts of subjects, are taught through a foreign language with dual - focussed aims, namely the learning of content, and the simultaneous learning of a foreign language.”

「CLILとは、科目あるいは科目の一部が、内容の学習とそれと同時に起こる外国語の学習という2つの目標をもって、外国語で教えられる状況のことである。」（笹島，2013）

つまり、CLILの目標は内容学習（教科）と語学学習（英語）を効果的に結びつけることによって、学習の相乗効果を図ることにあると言ってよいだろう。また、Marsh（2000）はCLILを用いた実践の効果として、学習言語に興味のある内容を学ぶための手段として使用することによって、体験的理解が深まり、学習に対して前向きな態度が育成される可能性が高いことを指摘している。この前向きな態度の育成（学習の動機付け）を促すための手法としての効果を検証したいというのが、筆者が研究対象としてCLILを選んだ要因の一つでもある。池田によれば、CLILは理論上、以下のように位置づけられる。

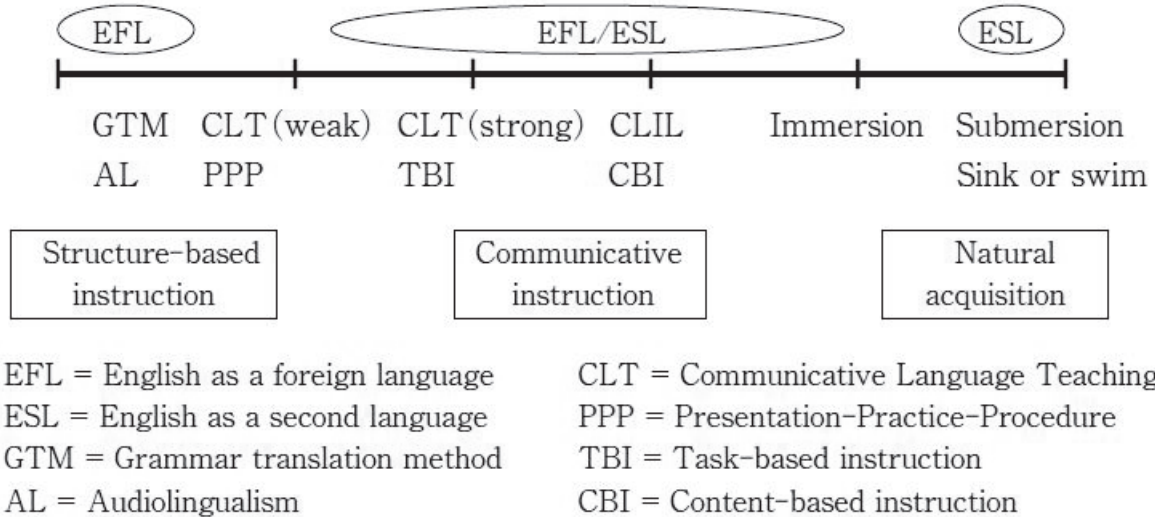


図1 CLILの理論上の位置づけ(池田, 2011)

CLILの授業形態には柔軟性があり，教育現場の実情に合わせた様々なバリエーションが許されている．それもCLILの特徴の1つとされている (Bentley, 2010; Coyle, 2007; 池田, 2011; 笹島, 2011)．池田 (2011) はこのバリエーションを①目的，②頻度・回数，③比率，④使用言語の4つに分類し，以下のようにまとめた (図2)．

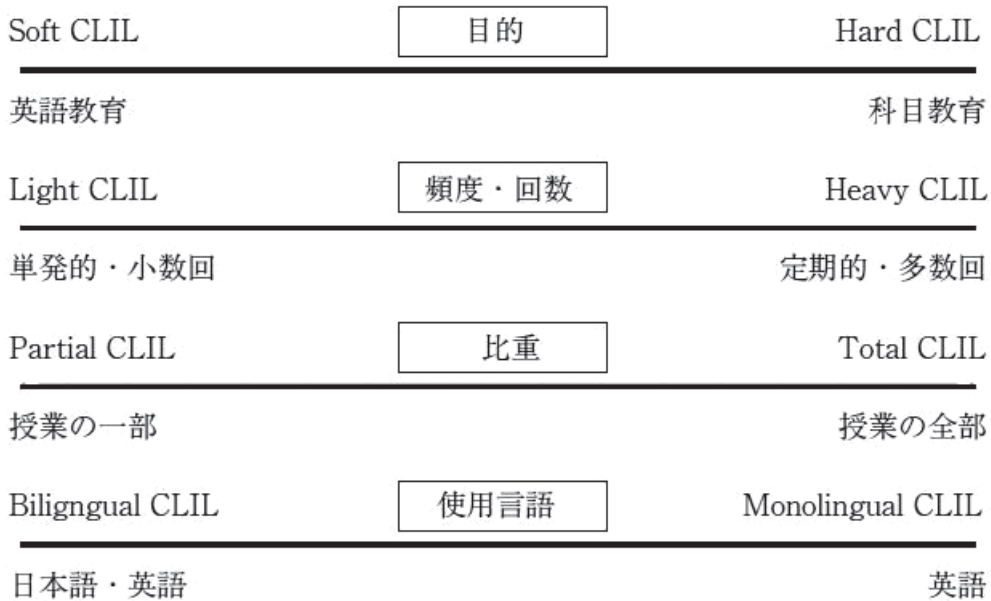


図2 CLILのバリエーション(池田, 2011)

教科やトピックなどの内容を学びつつ，言語知識や技能を高める指導法には，イマージョンやCBI (Content-Based-Instruction)などの手法が以前から存在している．これらの違いについて池田 (2013) は以下の2点を指摘している．まず一つ目は目的の違いである．イマージョンはネイティブスピーカーが教える科目教育であり，CBIは語学教師が教える英語教育を指す．一方でCLILは科目と語学の両方の習得を目指しているところに特徴がある．二つ目は方法論の違いである．CLILでは内容と言語だけでなく，思考と他者との学びも意識的に統合される．その融合される要素を表したものが「4つのC」と呼ばれるものである．

2. CLILの「4つのC」

CLILには4つのCと呼ばれる原理がある。①内容(Content)、②言語(Communication)、③思考活動(Cognition)、④文化・国際理解/協同学習(Culture/Community)である。1つ1つの要素に目新しさはないものの二五(2015)は、4つをセットとして外国語指導法に包括的な形で組み入れたのはCLILが初めてである、と評価している。この4原理については山野(2013)が以下のように説明し、小学校外国語活動においてどのように取り入れることができるか言及している。

(1)Content (内容)

Content(内容)とはCLILの授業の中で取り扱われる単一教科による内容、もしくはテーマ・トピックに沿った教科横断型内容のことであり、学習環境によって単独、もしくは継続的に取り入れることが可能とされている(Bentley, 2010; Coyle, 2010; 池田, 2011; Mehisto, 2008; 笹島, 2011)。小学校学習指導要領では「指導内容や活動については、児童の興味・関心にあったものとし、国語科、音楽科、図工科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること」(文部科学省, 2008)と提案しており、CLILはそれを具現化する指導法の1つとして活用できるのではないかと考えられる。社会や理科、算数などは、内容を英語と関連させやすいため、数は少ないものの先行実践が確認できた。実際に小学校で実践する場合には、学習者にとって学ぶ価値のあるもの、言い換えれば、教科にとっても語学にとっても関連性があるものを扱うことが大切になるだろう。しかし、1時間または1単元のすべてをCLILで行うのは小学校段階では現実的ではない。授業の中に部分的にCLILの要素を組み込んでいくなどの工夫が必要となる。

(2)Communication (言語)

Communication(言語)とは授業の中で使用される学習言語のことである。CLILでは訳読知識の学習や訓練よりも、「対人コミュニケーションと学習ツールとしての言語使用に高い比重が置かれる」(池田, 2011)。具体的には「3つの言語」を使用することで言語活動が促進される示唆されている。それは、① language of learning(学習の言語)、② language for learning(学習のための言語)、③ language through learning(学習を通しての言語)である。まず、language of learning(学習の言語)とは内容の理解のために必要な語句や表現で、外国語活動では単元の目標となる英語表現のことである。次にlanguage for learning(学習のための言語)とは、学習活動を行うために必要な表現で、外国語活動では「クラスルームイングリッシュ」と称されるもので、Hello. Look at this. など、単元の目標とはならないが、授業を行う際に、指導者が使用する英語表現を示す。最後のlanguage through learning(学習を通しての言語)は学習における偶発的、繰り返しの言語である。CLILの授業の中で、活動を行う際、単元の目標として計画していない単語や英語表現が必要になる場合がある。例えば、学習の言語として「色の名前」を単元の学習目標とし、図工などの内容で創作活動に取り入れる場合、指導者が教えた以外の色を生徒が使用することがある。このように、その学習を通して出てくる偶発的な言葉を「学習を通しての言語」と呼ぶ。それに加えて「学習を通しての言語」にはもう1つの役割がある。それは「学習の言語」と「学習のための言語」をつなぐ役割をする繰り返しの言語である。例えば、色を「学習の言語」として習った後、指導者がLook at the blue sky. It is sunny today. など、機会を見つけて、すでに学んだ言語をさまざまな文脈の中で何度も使用することにより「学習のための言語」として定着していく。このように、指導者が機会を見つけて授業の中で繰り返し使用される言語、もしくは、生徒の学習から出てくる偶発的な言葉を総じて「学習を通じた言語」と呼ぶ(山野, 2013)。教師や児童生徒が積極的にコミュニケーションを図るために必要な学習言語ということであるが、時間・語彙ともに限られた環境である小学校においては、母語の比重

が相対的に高くなることが予想される。池田（2011，図2）でいうところのBilingual CLIL，Partial CLIL，が実践の中心になることが予想される。

(3)Cognition（思考活動）

Cognition（思考）とは，授業の課題の中で，生徒が行う思考活動を示している。学んだ内容を生かし，それらを既存の知識や学習スキルと統合しながら，意味ある文脈の中で，学習言語を使って考え発話しようとする活動のことである（Coyle, 2010；和泉, 2011；Mehisto, 2008）。これは内容による良質なインプットと同様に，言語習得に必要不可欠な構成要素とされる「理解可能なアウトプット（comprehensible output）」（Swain, 1993）のために重要とされる（Coyle, 2010；和泉, 2011）。さらにCLILではCognition（思考）の説明のためにBloomの思考の分類を活用している。

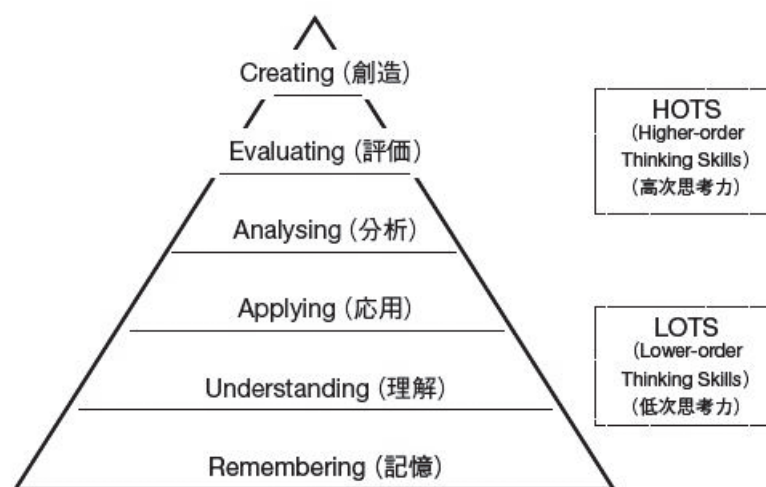


図3 ブルームによる思考の分類(池田, 2011)

この図は思考の難易度を示したものであり，記憶（暗記する・名称を言う・一致させる，など）から理解（説明する・要約する，など），応用（使用する・実践する・実行する，など），分析（比較する・整理する・発見する，など），評価（確認する・判断する・仮説を立てる，など），そして創造（創出する・作る・発明する，など）と，上に行くほど思考活動が難しくなっていくことを表している（山野, 2013）。

(4)文化・国際理解/協同学習 (Culture/Community)

文化・国際理解/協同学習 (Culture/Community) とは，教室での協同の学びを中核として，世界の文化や国際理解についても学びを広げることにより，さまざまな文化や世界の生活などについても学び，他者を認め，さらには自国の文化や言語の理解を深めることを目的としたものである（Coyle, 2010；池田, 2011；Mehisto, 2008）。これは狭義では，外国語活動学習指導要領にある指導計画の作成と内容の取り扱いにある「友だちとの関わりを大切にした体験的なコミュニケーション活動を行うようにすること」（文部科学省, 2008）に，また広義では国際理解に体験的理解を深めるという提案と，外国語活動の目標の3つの柱の1つである「(外国語を通じて) 言語や文化について体験的に理解を深める」（文部科学省, 2008）に通じるものではないかと考えられる。これらを根拠として外国語活動にCLILを指導法の一つとして取り入れることが可能ではないかと考える。

3. CLIL を取り入れた先行事例

教科などの内容を取り入れた小学校外国語活動の実践は、まだまだ少ないのが現状である。しかし、山野は全国の公立小学校の研究協力者とともに、複数の実践を報告している。それを北條(2017)がまとめたものが以下の表である。

山岸 (2010)	新潟県 6年生 32名	国語(漢字の偏やつくりなどの部首と英単語、画像を組み合わせた)、漢字を作ることで、漢字の部首に当たる英語表現に親しむ)。食育(身近にある食べ物を用い、2つの食材を組み合わせて別の味を再現する活動を通して、How does it taste? It's sweet/ salty/ bitter/ sour/ hot.)と答える表現に親しむ)。算数(錯視図を用いて、ものの長さ、大きさ、形を比べることにより、Which is longer, A or B? Which is bigger, A or B? など、長さや大きさを表す英語表現に親しむ)という内容を取り入れ、スマートボードを活用した外国語活動プログラムを開発した。	ARCS 動機づけモデルに基づく5つの側面が高い評価を受けたことからスマートボードを活用した CLIL 型の学習プログラムは、6年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があった。しかし、「自信」の側面の評価が若干低かった。特に6年生にとって、国語の内容のうち、単純な組み合わせ問題は、やや物足りない内容であった。
山野 (2011)	山口県 長野県 埼玉県 東京都 大阪府 5・6年生 208名	各小学校において社会科、道徳、家庭科、国語、算数、理科と統合した CLIL 授業を実践した。大阪府では“Hi, friends2”を用いて通常の外国語活動を non-CLIL 授業として行い、CLIL 授業と比較した。	CLIL の4原理を促進できる可能性があった。しかし、課題として CLIL 型授業における英語の多様性と難しさ、4原理を取り入れた指導案作成における教員の負担が大きくなった。
茂木 (2013)	新潟県 5年生 46名 6年生 52名	CLIL 的外国語活動の実践として、食育とタイアップした「私のオリジナル弁当」を紹介する活動を行った。What would you like? Looks delicious. Looks good. Looks healthy. など自然な英語表現を扱った。	CLIL 型の学習プログラムは、4年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があった。特に「自信」に関する項目が有意に高かった。食育以外の他教科とのコラボレーションによる CLIL 的外国語活動の開発により、子どもの外国語活動に対する自信を高める効果があるのかどうかをさらに検討する必要があることが課題となった。
永島 (2014)	新潟県 6年生 113名	社会科(世界の色、国旗、世界の料理)と内容面で連続性があり、そこに絵本の読み聞かせ、チャンツを組み合わせた外国語活動プログラム3回分を開発した。	CLIL 型学習プログラムは、6年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があった。ARCS 動機づけモデルの5つの側面のうち、「自信」の評価が若干低かったが、注意、適切性、自信、満足感、意欲という5つの側面が高い評価を受けた。
二五 (2013)	広島県 6年生	ひろしま型の指導案の枠内で多重知能や教科横断的指導(算数)の視点を独自に盛り込み、「英語の数」をテーマとする英語科の授業を3回続きで実践した。	算数の計算を取り入れ、英語学習だけを意識することなく、インプット量やコミュニケーションの機会を増やし、自然に数の語彙の定着を図ることができた。教科横断的には国語・音楽・体育・図画工作など多様な活動を取り入れることにより、たとえ算数が苦手であったとしても、45分の英語の授業時間内にどの子どもにも少なくとも一つは活躍の場を提供することができた。
金安 (2015)	新潟県 4年生 64名	社会科(日本と世界の地図記号を用いて、What's this mark? という表現に親しむ)。算数(1から59までの英語表現に慣れ親しむ)What time is it? It's - (o'clock). と言える)、国語(十二支の英語の生き物表現を知り、十二支時計を用いて方位と時刻の言い方に慣れ親しむ)という内容を取り入れた外国語活動プログラムを開発した。	CLIL 型の学習プログラムは、4年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があった。ARCS 動機づけモデルに基づく4つの側面が高い評価を受けたが、「自信」の側面の評価が若干低く、4年生の自信をどのように向上させるのが課題として残った。

表1 他教科の内容を取り入れたCLIL型の実践授業(北條, 2017)

Ⅲ 授業実践

1. 研究の目的

本研究の目的は以下の2点にある。

- ① 小学校外国語活動において、CLILの要素をどの程度取り入れることができるか、授業実践を通して検証する。
- ② CLILの4原理をどのように取り入れて授業を構成するのか、また、児童のワークシート及びアンケートから学習の動機付けにどの程度影響を与えるのか分析を行う。

2. 研究の方法（調査対象校・対象者等）

調査対象校は山梨県の公立小学校である中央市立田富小学校の5年生2クラスである。対象者は外国語活動が始まってまだ間もなく、一部の塾などに通っている者をのぞき、大半の児童が英語の学習をスタートしたばかりという状況である。そのため「話す」「聞く」は十分にはできないものの、外国語活動に対する興味関心は全体的に高い。また、調査対象校は県内でも有数の外国籍児童が多く在籍する学校であり、対象者の中にも第一言語がポルトガル語、またはペルー語という児童が複数在籍している。日常的に日本語、ポルトガル語、ペルー語が飛び交う環境にあることから、異文化に対するの受容には柔軟な土壌があると言える。

教科は家庭科の「野菜をゆでておいしく食べよう・調理実習（4時間）」の単元である。本研究では通常の教育課程の中にCLILの要素を取り入れることを重視しているため、教科書準拠のテキストをベースにしながらオリジナルのワークシートを作成した。これは、提案のための特別な授業にするのではなく、現場で無理なく取り組める実践でなければ、CLILが小学校現場で受け入れられる手法にはなり得ないと考えたためである。実際に使用したワークシートは以下の通り（図4）。



<h2 style="margin: 0;">Let's make vegetable salad</h2> <p style="margin: 0;">Plan&Practice (計画・実習)</p> <p style="margin: 0;">No()Name ()</p>				
Menu 料理名				
Material 材料	分量 Quantity		できあがり図	
	1人分	()人分		
作り方 How to make				
① <div style="text-align: right;">  </div>				
Date		感想・勉強したこと		
月 日 ()				
月 日 ()				
実習当日 月 日 ()				
ふり返ってみよう Reflection		◎ or ○ or △		
安全で衛生的な調理用具の使い方や調理ができたかな。				
計画を立てて、手順を考えながら調理ができたかな。				
仲間と協力しながら準備や片付けができたかな。				
習った英語を使ってコミュニケーションをとることができたかな。				

図4 児童用ワークシート

全4時間の内、1時間目と2時間目の学習は筆者のみで行い、調理実習本番は筆者とALTのチーム・ティーチングで行った。これは、学習した英語表現を用いてALTをもてなすことを目的とすることで、児童にとってコミュニケーションを行う必然性を生むことをねらったためである。また、各班で野菜の担当を分けて、教師のもとに材料を取りに来る場面を設定した。そうすることで全児童が必ずWhat do you want? ~ please. のやり取りを行う場面を保証した。使用語彙・表現は、以下の通りである。

word	dialogue
【野菜】 cabbage,broccoli,carrot	A: What do you want?
【調味料】 salt,vinegar,salad oil,pepper	B: ~ please.
【序数】 first,second,third,fourth,fifth	A: Here you are.
【作業】 boil,wash,cut	B: Thank you.
【感情】 delicious,good,(Yummy)	A: You are welcome.

表2

調理器具まで含めると、単語数が上記の倍以上に増えてしまうため、今回は除外した。ワークシートへの記入については英語でも日本語でもよいとした。

授業後には児童の反応を見るために、無記名式のアンケート調査を実施した。アンケートの選択肢については「とても」「まあまあ」（以上、肯定意見）と「あまり」「まったく」（以上、否定意見）の4段階に分けて分析を行った。回答選択式項目は下記の4項目である。

- Q1. 今日の授業は楽しかったですか。（授業の楽しさ）
- Q2. 先生の言っていることはわかりましたか。（言語理解）
- Q3. 英語で調理の仕方がわかりましたか。（内容理解）
- Q4. 英語のことをもっと知りたいと思いましたか。（異文化理解への意欲）

加えて、授業を参観していただいた教員にも①CLILの実践を行ってよかったと思う点について、②CLILの実践において難しいと思う点についての質問紙調査を行った。

3. 授業の目標

授業の目標は図6の通りである。

Content	Communication	Cognition	Community/Culture
家庭科 「調理実習（ゆで野菜サラダ）」を英語を用いながら行う。	【学習の言語】 食材名 (cabbage,broccoli,carrot) 調味料 (salt,vinegar,salad oil,pepper) 序数 (first,second,third,fourth,fifth) 作業 (boil,wash,cut) 感情 (delicious,good,Yummy)What do you want? ~ please. を使った英語表現に慣れ親しむ。 【学習のための言語】 What is this? It is～. など	ゆで野菜サラダ調理の際に必要な学習言語の暗記・理解。 学習言語を使用しての調理・言語の運用。	学習言語を使いながら、班ごとに協力してゆで野菜サラダを作成する。 調理が終わり次第、班ごとに試食を行い、英語でコミュニケーションを行い感想を共有する。 ALTと交流し合い、食文化の違いについて知る。

表3 家庭科CLIL授業目標

4. 授業の概要

授業の冒頭、筆者（授業者）が Today, we make vegetable salad in English. と授業の目標を告げると、児童から歓声があがった。第一時から第二時の授業でも感じたことだが、児童の外国語活動に対する興味関心の高さを再認識することができた。調理実習のゲストである ALT の自己紹介の後、食材や作業手順の絵カードや実物を児童に見せながら、What is this? と尋ね「学習の言語」（図 6 参照）を導入していった。次に ALT が絵カードを提示しながら、英語で料理の工程を児童に説明した。その後、班ごとに調理実習を行った。

教科間の連携を重視した CLIL の視点を授業に生かすためには、活動が言語学習だけではなく、家庭科の内容の学習ともなっていることが大切である。ALT と協力しながら活動中の班を回り、first/second/third などの序数を使いながら手順を確認し、boil/wash/cut を使いながら一緒に作業を行った。材料をもらいに来るときに全員が使用した表現である～ please. Here you are. Thank you. 等の表現は、教師とのやり取りばかりでなく、班の中で児童間でも使用している姿が見られた。

授業の中で特徴的であった 2 点について記述する。1 点目は、ALT が机間指導の中で用いていた Be careful! や Are you all right? や Clean the table. 等の声掛けに対して一生懸命意味を想像していたことである。ゲストの ALT はほとんど日本語を理解していないという設定だったため、相手の言っていることを理解する必要性や、ジェスチャーなどの非言語コミュニケーションが自然に求められる場ができていたのだろう。それでも、まだ外国語活動が始まって数か月の児童であるため、完全に意味を理解することが困難な場面も見受けられた。その際には日本語で意味を伝え、理解のフォローを行った。

2 点目は、既習事項にない「半月切り (half-moon cut)」を紹介した際に、何人もの児童が日本語も英語も同じ表現であることに気づけたことある。Do you know Moon? と ALT が尋ねると、「あっ、月?」「じゃあ、ハーフは・・・、半分！半月切りだ!」「なんだ、英語も同じだ」「なんで同じなんだろう。」発見と疑問を次々と口にしながら、児童は作業をしていた。当初の予定では扱う予定のなかった表現ではあるが、思考活動 (Cognition) を深めることができたのではないかと考える。その後、「盛り付ける (dish up)」や「おいしい (Yummy)」の表現も児童の様子を見ながら導入したが、特に Yummy はよく使っている様子が見られた。

5. アンケート調査の結果と考察

	とても	まあまあ	あまり	まったく	人数計 (%)
質問 1	42(84)	6(12)	2(4)	0(0)	50(100)
質問 2	35(70)	10(20)	5(10)	0(0)	50(100)
質問 3	38(76)	8(16)	4(8)	0(0)	50(100)
質問 4	40(80)	8(16)	2(4)	0(0)	50(100)

表 4 児童による質問紙アンケート調査結果

- Q1. 今日の授業は楽しかったですか。(授業の楽しさ)
 Q2. 先生の言っていることはわかりましたか。(言語理解)
 Q3. 英語で調理の仕方がわかりましたか。(内容理解)
 Q4. 英語のことをもっと知りたいと思いましたか。(異文化理解への意欲)

参観教員による質問紙調査回答

- ① CLIL の実践を行ってよかったと思う点

- ・他教科と英語を結びつける発想が面白かった。
- ・比較的平易な表現でも英語で指示が出せることを知った。
- ・ゲーム中心の外国語活動では難しかったが、場面に合わせた使える英語を教えられる。
- ・英語を合わせることで生き生きと学習に参加できていた。

② CLILの実践において難しいと思う点

- ・独自にCLILの考え方で教材研究を行う必要がある。
- ・扱う内容の難しさがある。今回は家庭科の調理実習だったが、年間通してこの考え方で授業を行うことは難しいと感じる。
- ・小学生は前提知識がないので、どうしても日本語でのフォローが多く必要になってしまう。

授業後に実施した表4のアンケート結果からは、96%（質問1）が「授業が楽しかった」と肯定的な回答をした。Hi, freindsを用いた通常の外国語活動しか知らない児童にとって、家庭科と英語を統合した内容は新鮮だったと思われる。次に90%が肯定的な回答をした（質問2）である。数値としては悪くないが、詳細を見てみると「とても」と回答している割合が4つの質問の中で最も低いことがわかる。なるべく簡単な表現での指示を意識し、ジェスチャーや画像を使いながら授業を進めたが、1時間あたりに扱う内容が多かったため、理解が追い付かない児童がいたのも確かである。児童の学習の様子を観察しながら、より積極的な母語の活用も必要だった部分である。（質問3）の結果からは、92%の児童から肯定的な回答が得られた。ワークシートの記述を見ても、「～という表現が使えるようになった」「ゆで野菜サラダの作り方が分かった」等の意見が多く見られた。知識として理解するだけでなく、友達同士で使ってみる場面や、ALTや授業者とのやり取りの中で興味と知的好奇心を喚起できたことが肯定的な回答の多さにつながったものと考えられる。アンケート調査で最も大きく肯定的な回答が得られたのが（質問4）である。家庭科の内容を学習する中で、英語の学習を強く意識することなく自然とコミュニケーションの力を身に付けていくことができた。参観教員の見取りの中からも教科を統合することによって生まれる、学習の動機付けの効果が指摘されている。英語をゲームのための記号でなく、意思疎通を行うためのツールとして意識させることができた。そして、さらに学びを深めていこうとする動機づけにつながった結果がこの質問に反映されていると考える。

6. 成果と今後の課題

以上の研究の結果から、以下の4点を本実践報告のまとめとする。

- ① 他教科との統合により、児童の興味関心を高めることが可能である。しかし、小学校段階ということを考慮すると、あくまでPartialなものとするのが現実的である。言語の使用場面を授業者が1時間の授業内に明確に位置付けることが、児童の学習を保証し、言語学習ばかりでなく教科学習の学びを深めることにつながる。児童の理解の様子に合わせて、日本語によるフォローも積極的に進めていくことが望ましいだろう。
- ② 他教科を学びながらコミュニケーションをとることで、英語学習を意識することなくインプット量を増やすことが可能である。しかし、英語を学ぶ際には、どうしても決まったフレーズや基本的な単語の知識の習得が必要になる。それらを教え込むのではなく、教科の学びの中に無理のない範囲で入れていくことが重要であると考えられる。そこからより多くの語彙を知りたいと思う気持ちや、自分の考えや思いを相手に伝えたいという思いが生まれてくるものだと考える。
- ③ 小学校におけるCLIL実践においては、授業者のコーディネートが重要となる。学びを深めるた

めの場面設定や、教科と言語の内容を「どの程度」「どの場面で」「どのような方法で」取り入れていくのか考えるのは、やはり全科教員である小学校教諭ならではの視点である。

- ④ CLILを小学校外国語活動に入れていくには教材や手法の充実が必要である。本実践は通常の教育課程の中で、その中で使用される教材をアレンジして行ったが、まだまだ授業者の負担は大きいと感じた。そこで求められるのは指導計画（別業）の作成である。すべての単元・時間をCLILの手法で行うことは現実的ではない。どの教科の、どの場面で、どんな要素を統合することができるのか整理し、視覚化されたものを作成することで授業者の負担は大きく減らせると考える。同時に、作成した教材や指導案を共有していくためのシステムを構築することで、CLILが現在の外国語活動から2020年より正式に教科化された後の英語まで活用できる手法として現場に受け入れられるものとなるだろう。

授業者として実践を行い、CLILの有効性について手ごたえを感じている。今後も実践を重ねながら課題を一つ一つ解決していく中で小学校外国語活動、また、教科としての英語に貢献していきたいと考える。

児童のワークシート記入例

太田先生の授業ではふたつの英語の授業で使われていない単語をならえてよかったです。あまり英語でのコミュニケーションのやり方を知らなかったのが今回できてとても良かったです。この勉強ではいろいろな単語を教えただけその単語を書いたりするので書方も分かって良かったです。おいしいはいろいろな意味の英語があって意味はしついでということも知れました。2つの科目を合わせた授業がとても良いなと思いました。

図5

たこ先生にフロッピーディスクと
いえたのはうれしかった。
わたしたちの母は、たこ先生と
たべたので、マシーとか、Washとか、Cutとか、
Boilのはなしをしたり
ドレッシングのはなしをしたので、
とても英語が身近に感じられました。
ドレッシングを作るとき、Pepper(ペパー)と
Salt(ソルト)をいれすぎて少しからかったです。
おいしいは「おいしい」として覚えて
いたけれど、おいしいといいたい
たべわかりました。フロッピーディスクをいすかしかつたです。

図6

今日、実習をしました！
私は、Carrotの当番でした！Carrotとは、
切り方が半月切りという切り方ですが、英語
でも、半月切りの言い方は「ハーフ」な感じが
わかりました。わたしのチームでは、Carrotを
小さく切りましたが、味は同じでよかったです。

図7

Menu 料理名			ゆで野菜サラダ	
Material 材料	分量 Quantity		できあがり図	
	1人分	(5)人分		
Cabbage	→50g	→250g		
Carrot	→20g	→100g		
Broccoli	→50g	→250g		
Pepper	→1g	→5g		
Salt	→1g	→5g		
Salad oil	→10mL	→50g		
Vinegar	→5mL	→25g		

(Carrot) 作り方 How to make

- First (ファースト) cabbage, carrot, Broccoli } Wash (ワッシュ)
- Second (セカンド) Broccoli, carrot } cut (カット)
- Third (サード) cabbage, Broccoli, carrot } Boil (ボイル)
- Fourth (フォース) ... (混ぜる)
- Fifth (フィフス) ... (切る)

準備: 火を止める前に入れる!

図8

引用文献・参考文献

- ・文部科学省（2008）『小学校学習指導要領：第4章外国語活動』
- ・文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』，東洋出版社
- ・笹島茂（2011）『CLIL 新しい発想の授業』，三修社
- ・和泉伸一，共著（2012）『第二言語習得からみたCLILの指導原理と実践』，上智大学出版
- ・和泉伸一，池田真（2011）『CLIL（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たなる挑戦1』，上智大学出版
- ・池田真（2013）『CLILの原理と指導法』英語教育6月号，大修館書店
- ・山野有紀（2013）『小学校外国語活動における内容言語統合型学習（CLIL）の実践と可能性』
- ・山野有紀（2011）『小学校外国語活動におけるCLILの可能性』
- ・吉田研作（2017）『小学校英語教科化への対応と実践プラン』，教育開発研究所
- ・北條礼子（2017）『小学校英語教育における内容言語統合型学習（CLIL）の可能性：ドイツにおけるCLILをはじめとする英語教育事情にも注目して』
- ・二五義博（2014）『CLILを応用した二刀流英語指導法の可能性～小学校高学年児童に社会科内容を取り入れた指導を通して～』
- ・二五義博（2015）『小学校高学年における英語科授業の実践報告－他教科内容を活用したクイズの作成と発表を通して－』
- ・Cohen, L, Manion, L.&Morrison, K. (2011) *Research methods in Education* (7th ed.). New York: Routledge
- ・Marsh, D.(2000). *Using languages to learn and learning to use languages*. Finland: University of Jyväskylä